バックナンバーはこちら

ＪＡ全農ちば

営農情報集

2026
9

今月の情報

Ⅰ.　水田多年生雑草防除、ジャンボタニシ対策、土づくりについて

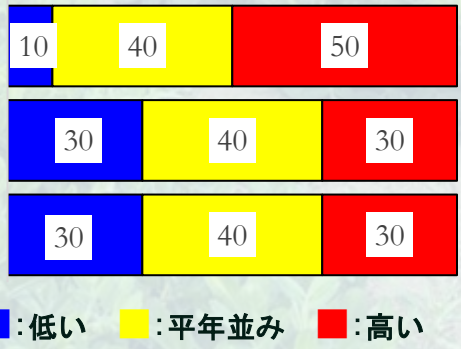
Ⅱ.　園芸野菜　病害虫防除情報

Ⅲ.　育苗期イチゴ管理について

Ⅳ.　安全な農作物生産の取り組みについて

今月の気象（気象庁８/２７発表　１か月予報より）

今月も平年と比較して、気温が高くなる見込みです。また天気は数日の周期で変わる予報となっています。
天気の変化に注意し、排水対策や適切な温度管理を心がけましょう。



注意とお願い

農薬登録内容は掲載時点の情報です。農薬を使用する際に必ず最新の登録内容をご確認ください。

営農情報　　令和８年９月

Ⅰ. 水田多年生雑草防除、ジャンボタニシ対策、土づくりについて

～次作に向けて秋から出来ること～

ＪＡ全農ちば　営農支援課

１. はじめに

農林水産省より公表された「令和８年産水稲の８月１５日現在における１０ａ当たり収量の前年比見込み」によると、千葉県は前年を「やや下回る」とされております。

全国の状況は、１０ａ当たり収量は、前年を「やや上回る」が24道府県、「平年並み」が19都県、「やや下回る」が３県となっています（令和８年８月３１日公表　農林水産統計より）。

翌年産も安定した収量・品質を確保するため、秋から来作に向け、秋防除・秋耕・土づくり等に取り組みましょう。

２. 難防除多年生雑草を秋のうちに防除しましょう（秋防除）

多年生雑草の多くは、地上部が枯死しても地下の塊茎が残り、次年度以降の発生源となります。

クログワイやオモダカは稲刈りが終わると地上部が再生してくるので、秋防除を行い、塊茎を枯らして発生源を減らしましょう。

（１）秋防除のポイント

ア. イネの刈取り高さをやや高くする(20cm を目安)。
イ. 根まで枯らすタイプの除草剤（ラウンドアップマックスロード 50 倍液等）を、再生した雑草の地上部にしっかりかかるように散布する。
ウ. 除草剤散布後２週間程度は耕うんを行わない。
エ. 霜が降る前（10 月末）までに散布する。


刈取り後に再生してきたオモダカ

３. スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の防除は地域で実施！

薬剤防除だけでなく、刈取り後の耕うん等による耕種的防除も重要です。

さらに、ジャンボタニシは地域の水路を通じて移動するため、一部水田だけの対策では防除に限界があります。被害を減らすためには地域全体でジャンボタニシの数を減らす必要があります。

地域全体で水田内の防除をしっかり行う、地域全体で冬季の水路掃除に取り組むなど、地域で連携を取り対策を行うことが、個体数を減らすために非常に重要です。

次作へ向けてしっかりと対策を図りましょう。

※ 本資料の無断使用・複写・転載を禁じます JA全農ちば 営農支援課

（１）刈取り後のスクミリンゴガイ対策

ア．石灰窒素の施用

水温１５℃以上の時期に３～４㎝湛水し、数日放置しジャンボタニシを水中に出させる。石灰窒素をむらなく２０～３０kg/１０ａ散布し、３～４日湛水のまま放置する。

（※魚毒性があるので、落水・かけ流しは避けます。また、次作の施肥量にも注意しましょう。）

イ．稲わらすき込み時のポイント

ロータリーの回転速度上げ、トラクターの速度を遅くして丁寧に耕うんして、土中に潜っている貝を砕きましょう。田面が乾き、固まっている時に行うのが効果的です。

4. 良質な米は秋の土づくりから！～稲刈り後の稲わらすき込み～

高品質のおいしいお米の生産は土づくりから始まります。土の養分供給力、急激な環境変化に対する抵抗力、作物の根の活力を高めることで、高品質で良食味米の安定生産につながります。

（１）土づくりの方法

ア．稲わらのすき込み(秋耕)

稲わらにはケイ酸などの生育に必要な多くの養分を含んでいます。稲わらをすき込むことで土壌養分と有機物供給を同時に行うことができます。しかし、すき込み時期が遅くなると、稲わらの分解不足により次作に次のような影響を及ぼします。

（ア）田植後、酸素不足（還元状態）により、根腐れをおこす。

（イ）微生物が土壌中の窒素を先取りし、初期生育が悪くなる。

田植え前までに分解が進むよう、刈取り後、秋の早い時期にすき込みましょう。腐熟促進には５～１０㎝の浅耕とし、必要に応じて腐熟促進剤を施用しましょう。また、次作の温室効果ガスの発生抑制にも秋耕が有効です。

イ．有機物を施用する

堆肥などの有機物の施用により、土の物理性の改善、地力の維持向上、土壌微生物の増殖促進に繋がります。また、堆肥には鉄やマンガンなどの微量要素や水田で不足しやすいリン酸、加里が含まれているので土壌の化学性の改善が図れます。

堆肥の施用量は牛ふん堆肥で１０ａ当たり１ｔ程度の施用が一般的です(堆肥の種類により異なります)。ただし、家畜糞尿の堆肥には肥料成分が多く含まれているので、化成肥料で施す基肥量は堆肥の成分を考慮した量としましょう。

ウ．深耕を実施する

稲わらのすき込み後は、深耕も検討しましょう。耕うん作業はロータリーが一般的です。砕土・整地が同時に行え、作業性が良い一方で浅耕になりやすくなるため、年々作土が浅くなり耕盤が硬くなる傾向が見られます。作土が浅いと①根が伸びにくい、②倒伏しやすい、③養分過多になりやすいなどの生産力の阻害要因となります。

対策として、根の分布範囲を拡げるため、プラウ耕による深耕やトラクターの速度を遅くし、ロータリー耕により深さ１５ｃｍ程度を目安に作土の拡大を図りましょう。

※　本資料の無断使用･複写･転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

（２）千葉県の水田土壌の養分状態について

水田土壌中のケイ酸と加里は、かんがい水のパイプライン化による自然供給量の減少やWCS（ホールクロップサイレージ）の普及、Ｌ型肥料・一発型肥料の長年利用で徐々に不足してきています。

ケイ酸と加里は玄米品質に重要な養分です。積極的に土づくり肥料を施用しましょう。

ア．ケイ酸の現状

土壌中ケイ酸の目標下限値は 15 kg/10ａ（全農の土壌診断基準値）です。

昨年度に診断した圃場（561 点）のうち、19.3%（108 点）の圃場でケイ酸含量が不足していました（図１）。特に、ケイ酸含量の不足はＣＥＣ（保肥力）の小さい砂質土壌で顕著に表れています（図２）。

イ．加里の現状

土壌中加里の基準値は 10-50 kg/10ａ（令和７年度　水稲土壌の平均ＣＥＣ２２の場合の基準値）です。

加里は 5.3%（30 点）の圃場で不足し、70.2%（394 点）の圃場が不足予備軍であることが明らかになりました（図３）。加里は土性にかかわらず不足してきています。

ウ．ケイ酸、加里の施用による品質向上効果

ケイ酸の施用により茎葉が硬くなり、病害への抵抗性が強くなるとともに、倒伏が軽減されます。また、受光態勢が改善されて登熟が向上し、さらに登熟期以降の稲株の温度を下げる効果（クーラー効果）によって、白未熟粒の発生抑制が期待できます。

加里は根張りを良くし、根の活性を維持するとともに、光合成産物により生成されたデンプンを籾に行きわたらせ、白未熟粒発生の軽減や粒の肥大に役立ちます。

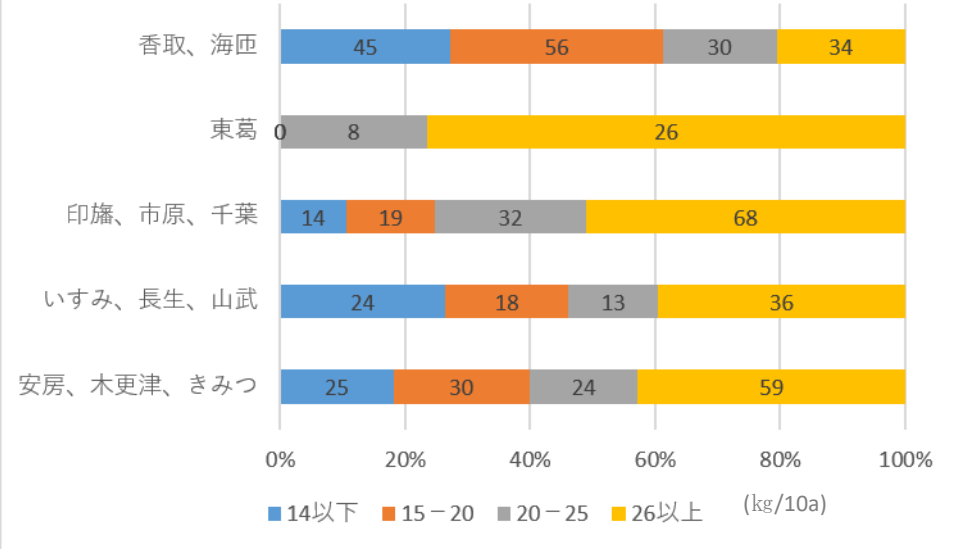


図１　令和７年度の地区別ケイ酸含量分布
令和７年度　水稲土壌診断結果（総点数：５６１点）をもとに作成
図中の数値は分析点数

※　本資料の無断使用・複写・転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

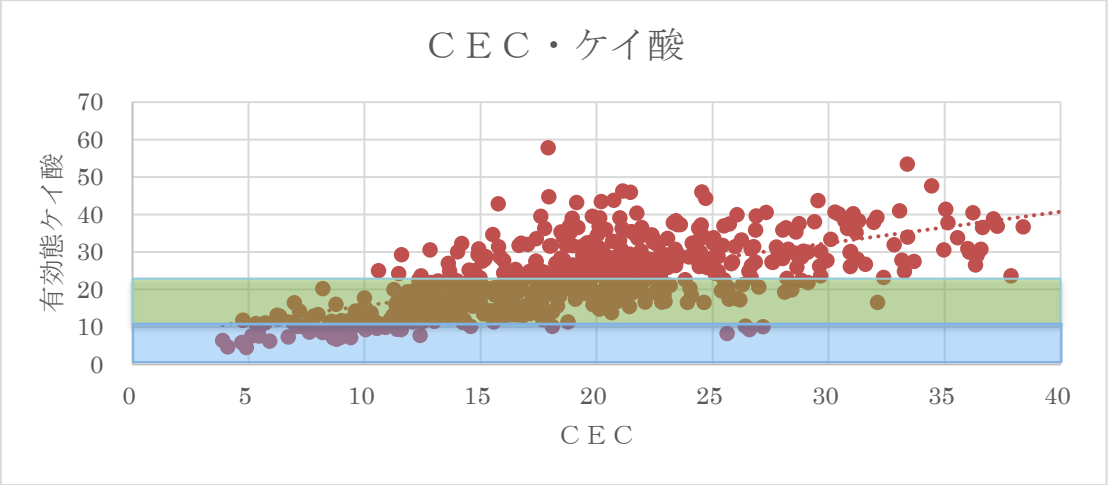


図２　ＣＥＣ（保肥力）とケイ酸含量の関係（令和７年度）
塗りつぶし範囲（青）…ケイ酸含量 15 kg/10a 未満
塗りつぶし範囲（緑）…ケイ酸含量 15 kg/10a 以上 20 kg/10a 未満

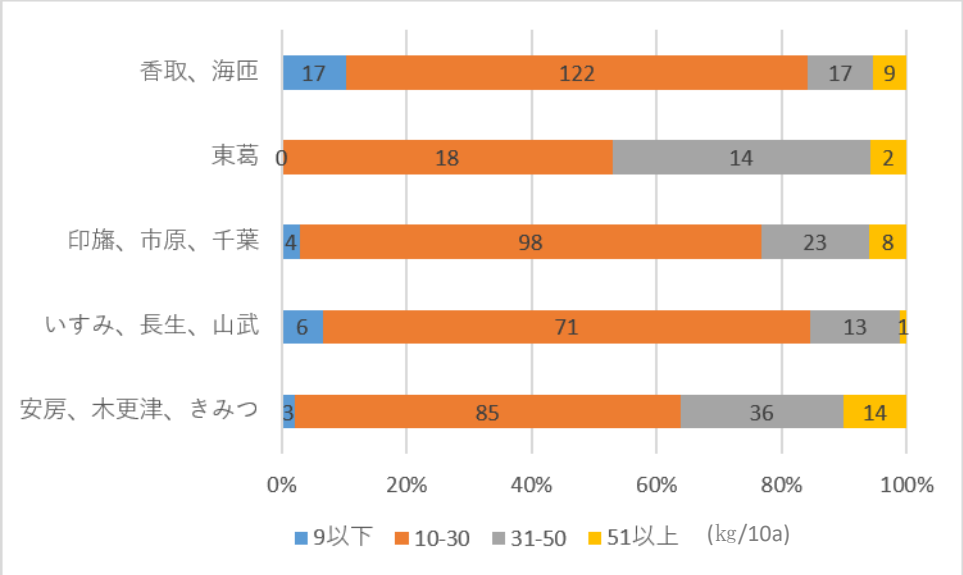


図３　令和７年度の地区別加里含量分布
令和７年度　水稲土壌診断結果（総点数：５６１点）をもとに作成
図中の数値は分析点数

エ．土づくり肥料による土壌化学性の改善

土づくり肥料は土壌の化学性や物理性を改善し、植物が生育しやすい土壌を作る資材です。例えば、石灰窒素の施用は稲わらを分解する土壌微生物の働きを助け、腐熟を促進させます。

土づくり肥料には用途目的に応じた多様な資材があるので、目的に合った資材を使いましょう。なお、以下のような水田圃場では、リン酸・加里の土壌含量が少ないことが予想されます。

（ア）　倒伏を回避するため、基肥及び穂肥の使用量を控えた圃場
（イ）　一発肥料のみの施用で穂肥分の加里が不足している圃場
（ウ）　稲わらを水田から持ち出し、堆肥を施用しなかった圃場
（エ）　Ｌ型（窒素成分が高く、リン酸成分加里成分が低い）肥料を使用している圃場

※　本資料の無断使用・複写・転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

（３）ごま葉枯病と次作への対策について

本病は葉に多数の病斑を生じ、登熟を低下させることや、激しい場合は穂枯れ症状等、品質・収量へも影響があります。砂質土壌や地力が少なくなった圃場など、「秋落ち」田で被害が多発します。

秋落ちは窒素・加里の他、鉄・マンガン・マグネシウム・ケイ酸などの欠乏で引き起こされます。

表１　主な土づくり肥料の特徴と使用方法

目的	肥料名	施用量(10a)	特徴
稲わらの腐熟促進	**石灰窒素**（窒素 20%）	１０～２０kg	有機物を腐熟する微生物の増殖に必要な窒素と、分解する働きを良くする石灰が含まれているので効果的。
	アグリ革命アクア	１００ml	酵素により、稲ワラの腐熟化を促進。液剤はオモダカ・クログワイなど、難防除雑草対策の秋防除除草剤と混用可。
	アグリ革命	２kg	
ケイ酸の補給	**農力アップ**（ケイ酸 20%）	３～５袋	従来のけい酸質資材と比較して利用効率が良いため、２～３分の１で効果を発揮。
リン酸の補給	**苦土重焼りん**（リン酸 35%・ケイ酸 9.4%）	２袋	火山灰土壌や基盤整備圃場等には、く溶性リン酸を含んだ苦土重焼りんが効果的。
総合的な土づくり秋落ち・ごま葉枯病対策に	**稲サポ**（窒素 0.8%、リン酸 7.0%、加里 6.0%、マグネシウム 3%、マンガン 3%、ケイ酸 8%）	３～７袋	土づくり効果の高い「牛ふん堆肥」「リンサン」「カリ」、秋落ち・ごま葉枯病の対策の「微量要素」、「ケイ酸資材」が１粒化。機械散布も可能



「稲サポ」（秋落ち・ごま葉枯病におススメ）



「ごま葉枯病」被害病斑

※　本資料の無断使用･複写･転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

営農情報　　令和８年９月

Ⅱ. 園芸野菜　病害虫防除情報

ＪＡ全農ちば　営農支援課

１. はじめに

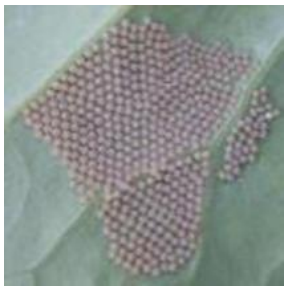
気象庁によると、むこう １ か月の平均気温は平年よりも高く、降水量・日照時間はほぼ平年並みの見込みです（８月２７日発表)。引き続き害虫の多発には十分注意しましょう。また、９月は台風の発生、接近が増加する時期です。気象予報に留意し、病害虫防除とともに、施設等の保全など事前対策を心がけましょう。

２. キャベツ(チョウ目害虫）

９～１０月にかけてヨトウムシ・ハスモンヨトウ・オオタバコガ・ウワバ類などが定植直後の株に被害を及ぼし、特に生長点が食害されると欠株を招きます。１０月以降はコナガの発生も増え、外葉の食害も増えてきます。そのため、９～１０月は重要な防除時期です。定植後からの早期防除を徹底しましょう。

（１）ヨトウムシ類

ヨトウムシ、ハスモンヨトウは卵を１か所に 200~300 個の卵塊で産み付けます。孵化後、幼虫は周囲へ分散し、成長するにつれて食害の量を増やしていきます。そのため、防除が遅れると被害を抑えることが困難です。夏が高温少雨の年は発生が多くなりますので、早期防除を徹底しましょう。



ヨトウムシ卵塊



ハスモンヨトウ卵塊



孵化直後のヨトウムシ



ハスモンヨトウ若齢～終齢幼虫

（２）オオタバコガ

オオタバコガはヨトウムシと異なり、一卵ずつ点々と産卵するため、初期被害も点々としています。中齢幼虫以降になると結球内部に潜り込むため、被害は極めて大きくなります。

（３）コナガ

幼虫は葉肉だけを食害し、葉の表皮を残すため葉が透けて見えます。多発すると畑全体が白く見えるようになります。薬剤への抵抗性の発達が非常に速い害虫で、千葉県内ではジアミド系薬剤（IRAC ｺｰﾄﾞ:28　フェニックスやプレバソンなど）の効果が低下しています。地域のジアミド系薬剤の効果に注意し、同じ系統の薬剤の連用、多用は避けましょう。



コナガの食害の様子

※ 本資料の無断使用･複写･転載を禁じます JA全農ちば 営農支援課

＜チョウ目害虫防除のポイント＞

ア．**若齢期（体長 1cm までが目安）までに防除**

同じ幼虫でも成長した後では薬剤の効果を十分に期待できませんので、発生前～発生初期の防除を心がけましょう。

イ．**薬剤のローテーション散布**

同じ系統（IRAC ｺｰﾄﾞ）の薬剤を連用、多用しないようにしましょう。

ウ．**葉裏まで薬剤がかかるようにたっぷり散布**

幼虫は葉裏や結球内部に潜るため、丁寧に散布しなければ薬剤が行き届きません。特に、浸透移行性の無い薬剤は注意が必要です。散布液量を多めにするなども効果的です。

○キャベツ　チョウ目害虫防除薬剤

対象害虫	IRAC ｺｰﾄﾞ	薬剤名	希釈倍数※	使用時期	使用回数
ﾊｽﾓﾝ・ﾖﾄｳﾑｼ・ｺﾅｶﾞ	４Ｅ	フィールドマストフロアブル	4000 倍	収穫前日	2 回以内
	２２Ａ	トルネードエースＤＦ	1000 倍	収穫７日前	2 回以内
ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ・ﾖﾄｳﾑｼ・ｵｵﾀﾊﾞｺｶﾞ・ｺﾅｶﾞ	５	ディアナＳＣ	2500 倍	収穫前日	2 回以内
	６	アファーム乳剤	1000 倍	収穫前日	3 回以内
	１１Ａ	ゼンターリ顆粒水和剤	1000 倍	収穫前日	―
	２８	プレバソンフロアブル５	2000 倍	収穫前日	3 回以内
	３０	グレーシア乳剤	2000 倍	収穫７日前	2 回以内
		ブロフレアＳＣ	2000 倍	収穫前日	3 回以内
	ＵＮ	プレオフロアブル	1000 倍	収穫７日前	2 回以内
ﾖﾄｳﾑｼ・ｺﾅｶﾞ	１５	マッチ乳剤	2000 倍	収穫７日前	3 回以内
ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ			3000 倍		
ｺﾅｶﾞ	２１Ａ	ハチハチ乳剤	1000 倍	収穫 14 日前	2 回以内

※登録のうち最大濃度を示しています（1000～2000 倍登録→1000 倍）

3. ネギ（ネギアザミウマ・ハモグリバエ・シロイチモジヨトウ）

（１）ネギアザミウマ

食害された痕は写真のようにかすり状に色が抜けて白くなります。卵から成虫までの生育期間は適温下で２週間程度と非常に速く、薬剤の抵抗性も発達しやすい害虫です。そのため、集中的・定期的かつローテーション散布による防除が必要になります。梅雨が短く、高温乾燥な夏となった本年は、すでに県内一部地域でアザミウマの多発が見られています。引き続き注意しましょう。



ネギアザミウマ成虫



ネギアザミウマの食害痕

※　本資料の無断使用・複写・転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

（２）ネギハモグリバエ　～新系統に注意！～

葉の内部に産卵され孵化した幼虫が葉肉を食害し、写真のような白い線状の食害痕を残します。４月ごろから発生し、年に５～６世代を繰り返します。被害は５月と８～９月に多く、暖冬や空梅雨・夏期の高温少雨は多発の要因となりますので、本年は特に注意が必要です。白斑が増加したら直ちに防除を実施しましょう。


ネギハモグリバエの食害痕

＜新系統（Ｂ系統）ハモグリバエについて＞

近年では、従来のネギハモグリバエの遺伝子型（Ａ系統）と異なる遺伝子型である別系統（Ｂ系統）の発生が確認されています。Ｂ系統は、従来系統と比較して葉に著しい食害痕が見られるほか、近接した食害痕どうしが重なり、葉が白化したようになるといった被害が見られます。激発すると、圃場全体が白く見えるようになります。一見すると、高温によるしおれや、白色疫病などの病害に類似していますのでご注意ください。両系統を形態で識別するのは困難ですが、現時点で系統間の薬剤感受性（農薬の効き方）の差は明確になっていません。本虫の発生が見られたら、系統に関わらず薬剤防除を実施しましょう。



新系統（Ｂ系統）ハモグリバエによる被害

○ネギ　アザミウマ類・ハモグリバエ類防除薬剤

対象害虫 ※1	薬剤系統 IRAC ｺｰﾄﾞ	薬剤名	希釈倍数 ※2	使用時期	使用回数
アザミ類・ハモグ類	５	ディアナＳＣ	2500 倍	収穫前日	2 回以内
	６	アファーム乳剤	1000 倍	収穫 7 日前	3 回以内
	１４	パダンＳＧ水溶剤	1500 倍	収穫前日	2 回以内
	２８	ベネビアＯＤ	2000 倍	収穫前日	3 回以内
	３０	グレーシア乳剤	2000 倍	収穫 7 日前	2 回以内
アザミ類・ネギハモ	２１Ａ	ハチハチ乳剤	1000 倍	収穫 7 日前	2 回以内
	３０	サイモディスＤＣ	2500 倍	収穫 7 日前	2 回以内
ネギアザ・ネギハモ	４Ａ	ベストガード水溶剤	1000 倍	収穫前日	3 回以内
	１５	カスケード乳剤	4000 倍	収穫 14 日前	3 回以内

※１アザミ類：アザミウマ類、ネギアザ：ネギアザミウマ、ハモグ類：ハモグリバエ類、ネギハモ：ネギハモグリバエ

※２登録のうち最大濃度を示しています（1000～2000 倍登録→1000 倍）

☆ネギは農薬が付着しにくい作物です。展着剤（ハイテンパワー、スカッシュ、ニーズ、ドライバーなど）を加用しましょう。

※　本資料の無断使用･複写･転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

（３）シロイチモジヨトウ　＊本年の多発生に注意！

８月６日に千葉県庁より、病害虫発生予察注意報としてシロイチモジヨトウの発生予報が出ています。葉裏などに卵を卵塊で産みつけ、ふ化した幼虫は集団で群生して食害をします。以下の剤は特に効果が高いですが、浸透移行性がないため薬剤がしっかりかかるような散布を心がけましょう。また、必ず、同じ系統の薬剤を連続で散布しないように心がけましょう。



シロイチモジヨトウ幼虫



シロイチモジヨトウ成虫

〇ネギ　シロイチモジヨトウ防除薬剤

IRAC	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数
５	ディアナＳＣ	2500～5000 倍	収穫前日	2 回以内
６	アニキ乳剤	1000～2000 倍	収穫 3 日前	3 回以内
30	グレーシア乳剤	2000～3000 倍	収穫 7 日前	2 回以内
	ブロフレアＳＣ	2000～4000 倍	収穫前日	3 回以内
UN	プレオフロアブル	1000 倍	収穫 3 日前	4 回以内

☆ネギは農薬が付着しにくい作物です。展着剤（ハイテンパワー、スカッシュ、ニーズ、ドライバーなど）を加用しましょう。

4. ダイコン（キスジノミハムシ・ハイマダラノメイガ）

いずれの害虫も子葉展開時から発生し始めますので、早めの防除を実施しましょう。

（１）キスジノミハムシ

早播き（8 月中旬～下旬）では被害が多く見られます。
成虫は体長数ミリで、食害痕として子葉に小さい穴が残ります。
根部の被害は土壌中に潜り込んだ幼虫が原因です。


キスジノミハムシ成虫と食害痕

（２）ハイマダラノメイガ（シンクイムシ）

成虫は体長 1～2ｃｍくらいの茶褐色の蛾で、葉裏に産卵します。幼虫は生長点を食害するため欠株の原因となります。
本葉 1～2 枚頃までに防除を行いましょう。


ハイマダラノメイガ幼虫と食害痕

〇ダイコン　キスジノミハムシ・ハイマダラノメイガ　防除薬剤

対象害虫	IRAC	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	備考
キスジノミハムシ	４Ａ	スタークル粒剤	9～12kg/10a	播種時	1 回	全面土壌混和
	３Ａ	フォース粒剤	6～9kg/10a	播種時	1 回	全面土壌混和
	４Ｅ	フィールドマストﾌﾛｱﾌﾞﾙ	4000 倍	収穫 3 日前	2 回以内	ﾊｲﾏﾀﾞﾗﾉﾒｲｶﾞにも登録あり
	30	ブロフレアＳＣ	2000～4000 倍	収穫前日	3 回以内	
ﾊｲﾏﾀﾞﾗﾉﾒｲｶﾞ	28	プレバソンフロアブル 5	2000 倍	収穫前日	3 回以内	

※　本資料の無断使用･複写･転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

Ⅲ. 育苗期イチゴ管理について

ＪＡ全農ちば　営農支援課

1. はじめに

９月となり、イチゴの定植時期が近付いてきました。本圃への病害虫の持ち込みを防止するためにも早めの防除、病害の感染が疑われる株の早期発見を心がけましょう。

また、定植苗はクラウン径が９ｍｍ以上の充実した苗を用いることを心がけましょう。

2. 病害虫防除

（１）炭そ病

ランナーや葉柄の病斑に形成された胞子が雨や灌水の飛沫とともに飛散し、托葉の部分からクラウン部に被害が発生します。そのため、ランナーや葉柄の発病を防ぐことが重要です。頭上灌水は発病を助長するので、低水圧の散水チューブや底面吸水マット等を使用しましょう。また、窒素過多や過繁茂は発病を助長しますので栽培管理にも注意しましょう。



ランナーでは黒色の病斑



地上部ではしおれの症状



クラウン部では
内側に向かい暗褐色に腐敗

○炭そ病　防除薬剤（苗床）

FRAC ｺｰﾄﾞ	薬剤名	希釈倍数 ※２	使用時期	使用回数	備考
M03	アントラコール顆粒水和剤	500 倍	仮植栽培期	6 回以内	予防
M04	オーソサイド水和剤 80	800 倍	収穫開始 14 日前	5 回以内	予防
M07	ベルクートフロアブル※１	1000 倍 2000 倍	育苗期 収穫前日	5 回以内 5 回以内	予防
10＋1	ゲッター水和剤	1000 倍	収穫開始 21 日前	3 回以内	予防・治療
12	セイビアーフロアブル 20	1000 倍	収穫前日	3 回以内	予防
52	アイーナ 20 フロアブル	2000 倍	収穫前日	3 回以内	予防・治療
M07＋53	フセキワイドフロアブル※３	1000 倍	収穫前日	4 回以内	予防・治療

※１　ベルクートは成分使用回数 10 回以内。育苗期 5 回以内、本圃 5 回以内

※２　登録のうち最大量・濃度を示しています

※３　ベルクートと成分使用回数共通の為注意

炭そ病は病徴が見られてからの防除は極めて困難な病害です。前年発生した圃場については必ず土壌消毒を実施し、栽培期間中も予防剤を定期的に使用して防除に取り組みましょう。

発病株は速やかに抜き取り、圃場から離れた場所で処分しましょう。また、これまで基幹剤であったＱｏＩ剤（アミスターなど）は、炭そ病に県内で耐性菌が確認されております。治療剤が少ないため、発生しないよう**予防剤主体で薬剤散布**を行いましょう。

※　本資料の無断使用･複写･転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

（２）疫病

高温・多湿時に卵胞子が発芽して遊走子を出し、根冠部などに侵入し被害が発生します。
炭そ病との症状が似ているので判別がつきにくいですが、薬剤散布をおこない予防しましょう。


地上部ではしおれの症状


根では褐変症状


クラウン部では
内側に向かい褐変症状

〇疫病　防除薬剤（育苗期）

FRAC ｺｰﾄﾞ	薬剤名	希釈倍数 ※１	使用時期	使用方法	使用回数
M03・4	リドミルゴールド MZ	1000 倍	育苗期	散布	3 回以内
21	ランマンフロアブル	500 倍	育苗期・ 生育期 収穫 30 日前	株元灌注	2 回以内
	オラクル顆粒水和剤	2000 倍	育苗期	土壌灌注	3 回以内

※１　登録のうち最大量・濃度を示しています

（３）ハダニ

ハウスにおけるハダニ増殖の一番の原因は、株に付着したハダニ（持ち込み）のため、定植前に集中して防除しましょう。また、ハウス内の除草も実施しましょう。薬剤散布を行う際は、かけムラが発生しないよう葉裏に薬液がかかるよう丁寧に散布しましょう。ダニ剤と気門封鎖剤の併用は相乗効果が得られるほか、抵抗性対策にも有効です。

〇ハダニ類　防除薬剤

IRAC ｺｰﾄﾞ	薬剤名	希釈倍数 ※１	使用時期	使用回数
6	アファーム乳剤	2000 倍	収穫前日	2 回以内
	アグリメック	500 倍	育苗期	2 回以内
20D	マイトコーネフロアブル	1000 倍	収穫前日	2 回以内
23	モベントフロアブル（灌注）	500 倍・50ml/株	育苗期後半 ～定植当日	１回
33	ダニオーテフロアブル	2000 倍	収穫前日	2 回以内
―	ピタイチ※１	500 倍	収穫前日	―
―	フーモン※１	1000 倍	収穫前日	―

※１　登録のうち最大量・濃度を示しています
※２　ピタイチ、フーモンは気門封鎖剤になります。
　　葉裏に届くよう、よりかけムラがないよう注意してください。

※ 本資料の無断使用･複写･転載を禁じます JA全農ちば 営農支援課

（４）アブラムシ

成虫、幼虫が葉裏や葉柄に群棲して吸汁加害します。新葉に寄生すると葉を巻いて萎縮させます。圃場周辺雑草からの有翅虫の飛び込みや、苗での持ち込みが主な発生要因です。圃場周辺の除草を行いましょう。

〇アブラムシ類　防除薬剤

IRAC ｺｰﾄﾞ	薬剤名	希釈倍数 ※１	使用時期	使用回数
4A	モスピラン顆粒水溶剤	2000 倍	収穫前日	2 回以内
4C	トランスフォームフロアブル	2000 倍	収穫前日	3 回以内
28	ベリマークＳＣ（潅注）	1000 倍・ 50ml/株	育苗期後半 ～定植当日	1 回
29	ウララＤＦ	2000 倍	収穫前日	2 回以内
36	エフィコンＳＬ	1000 倍	収穫前日	2 回以内

※１　登録のうち最大量・濃度を示しています

（５）コガネムシ類（ドウガネブイブイ）

成虫は葉を、幼虫は根を食害します。一般には、成虫よりも幼虫による被害が大きく、幼根を食害して生育不良、枯死など大きな被害を招くことがあります。成虫発生期から幼虫発生期までの７～９月が防除の適期です。圃場周辺に成虫の好む樹木が多いと多発するため、周辺樹木の成虫も防除しましょう。

〇コガネムシ類　防除薬剤

IRAC ｺｰﾄﾞ	薬剤名	使用量	使用方法	使用時期	使用回数
1B	ダイアジノン粒剤５	4～6kg/10a	土壌混和	定植時	1 回
1B	ダイアジノン SL ゾル （潅注）	500 倍 1,000ml/m² ※１	育苗ポット灌注	ポット 育苗時	1 回
4A	モスピラン粒剤	1g/株	植穴土壌混和	定植時	1 回

※１　10ａあたり 7,000～9,000 ポットの場合、１ポット当たり 110～140ml が目安になります。

＜潅注処理のポイント＞
- 下葉かきは丁寧に行い、灌注時に邪魔にならないよう準備しましょう。
- 弱めの水圧でゆっくり葉の上から丁寧に灌注しましょう
- 苗はコンテナ等に隙間なく並べ薬剤の流亡を防ぎましょう
- 薬剤を十分に吸収させるため、灌注前後の灌水は控えましょう。
  （薬液が吸収されずに流れ出てしまうことを防ぐため）

※　本資料の無断使用･複写･転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

3. 花芽分化について

花芽分化とは、ある条件が揃うといちごの生長点が「葉っぱ」から「花芽」を形成するように切り替わることです。

花芽分化したいちご株は、株を大きくさせる「栄養生長」から花芽（果実）を大きくさせる「生殖生長」に切り替わったサインにもなります。

未分化苗の定植は、**着花数の減少**や**収穫の遅れ**に繋がるため花芽分化について理解し、適切なタイミングでの定植を心がけましょう。

（１）花芽分化に必要なある条件とは？？

花芽分化に必要な条件は３つあります。

🍓低温条件🍓

低温条件について

～いちご花芽分化に必要な温度～

0～5℃	5～15℃	15～25℃	25℃以上
休眠状態	日長に関係なく 花芽分化する	短日条件下※で 花芽分化する	日長に関係なく 花芽分化しない

※表のとおり、花芽分化と気温は密接な関係です。

気温が高い状況が続いておりますので花芽分化を確認してから定植を行いましょう。

🍓短日条件🍓

短日条件について

日照時間が **13 時間以下**、平均気温が **25℃**を下回ると花芽分化が促進されます。

🍓低窒素条件🍓

過度な肥料切れは**『芽無し株』**の発生や**樹勢の低下**の恐れがありますのでご注意ください。

※　本資料の無断使用･複写･転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課

営農情報　　令和８年９月

Ⅳ.安全な農作物生産の取り組みについて

～農薬散布記録簿は正しく記入しましょう～

ＪＡ全農ちば　営農支援課

1. 残留農薬基準値超過事案について

残留農薬基準値超過事案は、千葉県でも毎年発生しており、回収事例も出ています。これは産地の信頼を損ねるものであり、徹底した対策を実施する必要があります。原因は農薬ラベルの確認ミスや周囲からの農薬飛散（ドリフト）、散布器具の洗浄不足などが挙げられます。残留農薬基準値超過事案が発生しないように、改めて生産者への下記５つの内容の指導、ＪＡでのチェック体制の強化をお願いいたします。

（１）農薬使用時の農薬ラベル（登録内容）の確認の徹底
（２）生産履歴の記帳、確認
（３）残留農薬検査の検体収去方法（出荷前検査）の確認
（４）農薬散布時のドリフト対策
（５）防除器具使用後のタンク・ホース内の十分な洗浄

2. 農薬散布記録簿チェック項目

事故を未然に防ぐために、農薬散布記録簿を「正しく記入する」ことが重要です。万が一事故が起こってしまった際に、農薬散布記録簿が迅速に原因を究明する鍵となります。

以下のチェック項目を日頃から守り、記入を徹底しましょう。



☐ 農薬を散布した日付を記入しましたか
☐ 農薬を散布した圃場を記入しましたか
☐ 使用した農薬名は正しく記入しましたか
　農薬は剤型（フロアブルや乳剤等）で登録内容が変わります！
☐ 使用した農薬の希釈倍数・使用量を記入しましたか
☐ 使用した農薬の使用回数・本成分を含む農薬の総使用回数は合っていますか
　混合剤（２成分以上が入っている農薬）は特に注意が必要です！
☐ 使用した農薬の使用時期は合っていますか
☐ 使用したすべての農薬を記入しましたか

3. 農薬散布記録簿の必要性

（１）出荷前に未然に事故を防ぐことができる
（２）事故やトラブルが発生した際、原因の所在を明らかにすることで迅速な対応ができ、被害を最小限に抑えることができる
（３）記録されていることにより、実需者・消費者に対して安全・安心を証明することができる
（４）毎年、防除が適正であったかを振り返ることができる
（５）保管することで、過去の記録を遡ることができる（３年程度は保管しましょう）

※　本資料の無断使用･複写･転載を禁じます　JA全農ちば　営農支援課